

8月 ニホンジカ



左前脚をなくしたニホンジカ



5



ニホンジカの親子。鼻先を付き合わせて挨拶を交わす

急増で捕獲も、くくり罠の功罪



後ろ脚がくくり罠にかかったツキノワグマ



すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町（現福知山市）生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に撮影に取り組む。米原市在住。写真集『Golden Eagle イヌワシ』（平凡社）など。

ニホンジカの生息数が近年急激に増加し、貴重な植物や農林業被害が深刻な問題となっている。30年ほど前までは、山に行ってもシカを見ることはほとんどなかった。秋になるとヒノキと繁殖期特有の長く尾を引く雄のラッティングコールが、その存在を知らせてくれた。今では、山に行くとも最初に出会う野生動物になった。

お花畑が有名な伊吹山も、山頂までシカの食害がおよんでいる。貴重な高山性の植物をはじめ、多くの草花がシカに食べられてしまい、シカが食べない植物だけが残ってしまっている。

伊吹山の登山道周辺では、登山客が少なくなる午後4時くらいになると、まわりの林の中からシカがソロソロと出てきて採食を始める。数えてみると80頭以上いた。植物が食べ尽くされて、裸地化が進んでいる。

シカを減らすために、銃や檻・罠を使ってシカを捕獲する個体数調整が、全国で繰り返されている。個体数調整は、被害を減らすための重要な対策なのだが、一方でシカ以外の動物の錯誤捕獲が増えていくことは大きな問題である。

特に、近年多く使用されるようになったくくり罠は、動物が仕掛けを踏めば、ワイヤに脚をくっついて捕獲される仕組みなのだが、目的のシカ以外の動物が誤って捕獲されてしまう欠点がある。手軽に設置でき、狭い範囲に数十もの罠が設置されているものも多い。

先日、くくり罠のキノワグマがかかっているのを見つけた。罠から逃れようとして暴れている。手当たり次第に近くの灌木に手をかけて、ぐいぐいと力任せに引っ張ったために、まわりの灌木は爪で引っ掻かれてズタズタになっている。クマは脚先を引きちぎってでも逃げ出そうとしている。

くくり罠のワイヤは、幹程度の長さがあり、それが灌木の枝に絡まってクッションのようになっている。クマがワイヤを引っ張る力を和らげている。このクッションがなかったなら、クマは脚先を引きちぎって逃げ出していただろう。数時間後、野生動物専門の業者が駆け付け、クマに麻酔をかけて罠から外し、奥山へ放獣した。

罠から脚先を引きちぎって逃げたと思われる3本脚のアナグマ・タヌキ・ニホンジカ、前脚と後ろ脚の片方ずつがなくなっている本脚になっしまったツツネなど、僕が見ただけでも多くの野生動物が被害を受けている。

ニホンジカを捕獲することはかりに気を取られて、まわりの状況が見えなくなってしまうのは元も子もない。野生動物の個体数調整は、個体数ゼロや被害ゼロを目指すものではない。一定数の野生動物を残して、ヒトとの折り合いをつけながら共存するという基本姿勢を忘れてはならない。

＝第3水曜に掲載予定